

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23401032

研究課題名(和文) エクアドル南部におけるインカ国家の拡大をめぐる実証的研究

研究課題名(英文) Archaeological studies of the Inca expansion in Mullupungo, southern highlands Ecuador

研究代表者

大平 秀一 (ODAIRA, Shuichi)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：60328094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、アンデス北方のインカ国家の中心都市の一つトメバンバ西方約50kmに位置するムユブンゴ山系領域において、簡易的に構築されている2000基以上におよぶ墓の一部の発掘調査を実施した。

調査・研究の結果、これらの墓には、ムユブンゴ領域に生じた大規模な先住民間の抗争の犠牲者が、緊急的・簡易的に埋葬されていることが明らかとなった。これは、スペイン人の16世紀の記録に書き残された、インカ国家の拡大時に生じた大規模な武力抗争の痕跡を示す、学史上はじめて得られた考古学的データである。

研究成果の概要(英文)：In this study we carried out the archaeological investigations in the area of Mullupungo mountain range, located about 50km west of Tomebamba, one of the principal Inca cities in the south highland of Ecuador. In this area more than 2000 tombs at a rough estimate remained, whose general structure is a simple pit, about 1m-diameter and 1 to 1.5m-depth, dug on the ground. The principal purpose of our study is to explain the meaning of these tombs scattered in various zones of the area.

The result of the archaeological investigations in the area shows that people of the Inca like mitimaes, labors taken from other regions, were extensively attacked and killed by other native political unit, and that they were buried urgently in these simple tombs. These could be the first archaeological evidences of extensive battles between native people in the Inca states, which were often described in historical sources written by Spanish chroniclers.

研究分野：人文学

キーワード：アンデス先住民史 インカ国家 武力抗争 墓 埋葬

## 1. 研究開始当初の背景

インカ国家は、ペルーのクスコを中心として、15世紀半ば以後からアンデス地域に急速に拡大し、スペイン人の「征服者」によって王が処刑された1533年以後に、衰退の一途を辿った先住民社会である。

同国家に関する研究は、スペイン人の記録が多く残され、かつ遺跡の残存状況も相対的に良好なクスコを基点に据えた眼差しで進められてきた。しかしながら、南北4000km以上にわたって拡大した社会の理解を深めるためには、周縁・フロンティア領域を対象とした調査・研究も、大きな意義をもつことになる。

こうした視点にたち、研究代表者は、1994年、エクアドル南部におけるインカ国家の中心都市トメバンバと、神々への供物としてアンデス全域で利用された「ムユ」という二枚貝の採取が可能なエクアドル海岸部を繋ぐ主要な谷の一つ、フボーン谷（ユンギーリヤ谷）において一般調査を実施した。これにより、アンデス山脈西山系の最西端部（ムユプンゴ山系）・標高3200mの地点で、ミラドール・デ・ムユプンゴ遺跡（以下「ムユプンゴ遺跡」と略記）が確認された。広場とウスノ（祭壇）を伴い「行政センター」の特徴を呈するこの遺跡は、下方に広がるアンデス西斜面領域・海岸部を肉眼で臨める場所に建設されており、海岸方向を睨んだ、インカ国家の重要な施設と判断された。1995～1998年の4シーズンにわたって発掘調査を実施した結果、ムユプンゴ遺跡は複数回に及ぶ人工的な破壊を伴って、建設途上で放棄されていることが明らかとなった。

2001～2002年の2シーズンには、海岸方向に下るアンデス西斜面も含め、ムユプンゴ遺跡周辺域において一般調査を実施し、やはり広場とウスノを伴い「行政センター」の特徴を帯びたラ・ソレダー遺跡（標高1800m）をはじめ、インカ国家の諸施設が確認された。これらには、水をめぐる施設（バーニョ・デル・インカ）、インカ道、トウモロコシ畑、神観念を伴う膨大な数の加工された岩（ワカ）、テラス化・整地された多くの聖なる山や丘、マチャイ（遺骸の安置場所）、そして概算で2000基以上におよぶ「土壙」（墓）などが含まれている。

この「土壙」は、一か所に集中的に構築されておらず、極めて多様なゾーンにおいて、見晴らしのよい丘上や斜面、尾根上などに認められる。さらに、インカ期以後に構築されていること、径1～1.5m程度、深さ1～2m程度のシンプルな掘り込みであること、掘り込んだ際に出た廃土を利用してすぐに埋め戻されていること、埋め戻す際に蓋状の石あるいは石組みを上部に配していること、儀礼行為を行った痕跡が認められること、などの特徴を有していた。こうした特徴と、複数回に及ぶ人工的破壊を受けているムユプンゴ遺

跡のデータを考え併せ、この領域に何らかの大規模な武力抗争が生じ、多数の「土壙」はその犠牲者を簡易的に埋葬した墓ではないかという仮説的解釈がなされた。しかし、この一般調査において、5か所で計10基の発掘調査を実施したものの、「土壙」からは人骨が一切出土せず、その仮説を実証することはできなかった。

2003～2006年の4シーズンには、ラ・ソレダー遺跡の発掘調査を実施した。その結果、ラ・ソレダー遺跡では、一度建設した儀礼施設を埋め戻してテラスを設け、その上に簡易的に短期間生活し、そのまま放棄されていることが明らかとなった。この領域における、おそらく80年にも満たないインカのオキュペイション（占有期間）の中に、少なくとも2期が明瞭に確認されたことになる。さらに上述した「土壙」の発掘も継続して実施したところ、人骨そしてインカ特有のアリバコ型壺をはじめとする土器・金属製トップ（女性用のショールを胸の部分で止めるピン）・針・ピンセット、石・貝・骨製そしてガラス製ビーズなどの副葬品が確認され、「土壙」がインカ国家に属する人々を埋葬した墓であることが実証された。しかも、カット・マーク（傷跡）を伴う人骨、頭部に対して下肢の位置が逆になっている事例、指の骨のみが出土した事例などが確認され、自然死した人間を埋葬した通常の墓とは異なる、極めて不自然な様相を呈していた。こうした墓の特徴に、ムユプンゴ遺跡ならびにラ・ソレダー遺跡で得られたデータを考え併せれば、ムユプンゴ領域では大規模な武力抗争が生じ、多様なゾーンで犠牲となったインカ国家側の人々が、緊急的・簡易的に埋葬された墓である可能性が極めて高まった。

しかしながら、これを実証し、加えてムユプンゴ領域におけるインカ国家の開拓・拡大をめぐる諸相の考察を進めるためには、さらなる発掘調査を加えてデータを蓄積していくことが不可欠であった。以上の経緯で、本研究課題は実施されることとなった。

## 2. 研究の目的

地球上のあらゆる社会が関連し合う現在、文化の多様性の理解が強く求められている。あらゆる社会は過去からの延長線上にあるのだから、意義ある他者理解がなされる上で歴史学的考察は欠かせない。ところが、その多様性を織り成す集団の大半は、歴史的に無文字社会であり、その歴史は文字を伴う権威・権力に満ちた社会集団による歪んだ眼差しに基づいた記述をもとに、虚像が描かれてきた。その結果、無文字社会の人々は、「野蛮」・「未開」・「発展途上」といった負のイメージを伴う一つの 카테고리の中に押し込められることとなった。無文字社会の人々が唯一直接的に残したメッセージを資料として扱う考古学は、弱者の声を顕わにさせて、

その真の歴史を解明し、文化の多様性の真の理解を深めることに大きく貢献し得る可能性を秘めている。

歴史的に文字をもたなかったアンデス先住民社会も、同質の問題を抱えている。16世紀前後の歴史の一面には、一方的な「発見」・「征服」の記録、強制的キリスト教化を含めた植民地化の過程で残された「管理」の記録などを基に、「インカ帝国」の名が冠せられ、皮肉にも文字なき民の実像を置き去りにしたまま、「帝国」、豊かな「黄金」、国家宗教としての「太陽神」といった怪しげなイメージと共に、現代の都市社会における確立された文化資源として消費され続けている。

この「帝国」像の源泉は、ペルーのクスコやエクアドルのトメバンバを拠点とするインカが、大規模な軍隊を駆使して周縁諸社会を制圧・吸収して領土拡大をはかるといった、「ローマ帝国」像の影響を受けてスペイン人が書き残した文書記録（クロニカ）にある。クロニカにおける大規模な武力抗争の記述は、特に同国家のフロンティア領域の一つであるエクアドルにおいて多く認められる。インカ国家と地方社会間、さらにはアタワルパとワスカルというインカ王族の兄弟間で生じた武力抗争では、1万人を超える犠牲者に関する言及も少なくない。しかしながら、大規模な武力抗争の痕跡を示す考古学的資料はこれまでに一切確認されたことがなく、それが史実であったかどうか検証することは困難な状況にあった。

ムユンゴ領域において、長期にわたった研究代表者の調査・研究を通して、大規模な武力抗争の痕跡を示す考古学的資料が学史上はじめて得られつつある。本研究課題の最大の目的は、少なくとも2000基以上におよぶ墓の発掘調査を進めてサンプル・データを増やし、これらが武力抗争の犠牲者を緊急的・簡易的に埋葬した墓であることを実証することにある。加えて、得られた墓のデータを基盤として抗争の詳細に迫ること、さらにはインカ国家の諸施設の考察を深めて、フロンティア領域における同国家の開拓状況を提示することも主たる研究目的の一部となる。

### 3. 研究の方法

標高3200mの地点に位置するムユンゴ遺跡は、南北方向にはしるアンデス山脈西山系上に位置している。この尾根は、西側において急峻な断崖となっており、その後さらに西側に向かって下る斜面が形成され、そのまま海岸部にいたる。ラ・ソレダー遺跡は、この斜面上・標高1800mの地点に位置している。一方、ムユンゴ遺跡の南東側の一部には、比較的緩やかに下る斜面が形成されており、地形の起伏を経ながら、標高1800mのセロ・ネグロまで下っている。

これまでの調査・研究を通して確認してい

る、武力抗争の犠牲者を簡易的に埋葬したと考えられる墓は、少なくとも10km×10kmの範囲の中の多様なゾーンに散在しており、一か所に墓域が形成されているわけではない。その分布は、ラ・ソレダー遺跡周辺域からムユンゴ遺跡周辺域、そしてセロ・ネグロにいたる領域に及んでいる。

本研究課題では、標高の差異を意識しながら、可能な限り多様な場所において墓の発掘調査を進めて、データを蓄積する手法が取られた。具体的には、ラ・ソレダー遺跡周辺域とムユンゴ遺跡周辺域を調査対象とした。

### 4. 研究成果

#### (1) ラ・ソレダー遺跡周辺域の成果

ラ・ソレダー遺跡周辺域において、発掘調査を実施したのは、同遺跡広場北東方向約0.5kmに位置するLIB区、同じく広場北方約1.5kmに位置するLRB区、そして広場南東約1kmに位置するLH区である。

LIB区は、セロ・ペンカルという丘の裾野から下る尾根の下方に位置している。墓が構築された場所からは、ロマ・デ・ポルボラ、セロ・ギリリウといった、インカ時代に信仰の対象となっていた山々を見晴らすことが可能である。周辺には、中央部分から二つに割られたような形に加工された大型の岩をはじめ、儀礼的意味を帯びた加工された岩（ワカ）が複数構築されている。LIB区では、2基の墓の発掘を実施した。これらの墓からは、石組やカーボンが検出されたものの、副葬品や人骨は出土しなかった。この発掘の過程で、隣接する小型のワカの周囲が、加工を施すために掘りこまれ、その後にこげ茶色土を詰め込んで床を構築していることが確認された。墓の一つは、その床・構築層を切り込んでいたため、墓はインカの人々による聖なる景観の整備・儀礼的空間の建設以後に構築されたことが明らかとなった。

LRB区は、これまでの調査で人骨や副葬品を伴う墓を検出したLR区の下方に隣接している。この地区では、2基の墓の発掘を実施した。しかし、副葬品・人骨共に検出されなかった。ただし、LIB区で得られたデータと同様に、土を積んで整地されたテラスを切り込んで墓が構築されていることが明らかとなった。

LH区は、近隣住民から「ロマ・デ・ロス・ウエコス（「穴の丘」の意）」と称されている丘である。その名が示す通り、この丘のピーク付近には、墓の構築に伴う多くの落ち込みが表土から観察することが可能である。LH区では、計6基の墓の発掘を実施した。これらの内、4基の墓（LH-TU3, TU4, TU5, TU6）で人骨と副葬品が出土した。また1基（TU8）からは副葬品のみが出土し、1基（TU7）には人骨が残存しておらず、副葬品も出土しなかった。

LH-TU3とTU4は、最初に径80cmほどの穴

を下方に 1m ほど掘り込み、その後横方向 / 斜め下方にドーム型の墓室（径およそ 150cm・高さ 140cm）を掘り込む、いわゆるブーツ型の形状を呈していた。この形状は、これまでの調査を通して、はじめて確認されたものである。アンデス地域のブーツ型の墓では、基本的に、墓室に遺骸を安置するための空間 / 部屋が設けられる。ところが、LH-TU3 と TU4 は、被葬者を埋葬した後、最初に掘り込んだ狭い円筒形の穴から、わざわざ墓室に土砂を投げ込み、その後大型の平石で墓室を塞ぐという、極めて不自然な状況を呈していた。

LH-TU3 からは、極めて残存状況の悪い人骨の破片・歯が出土した。歯の周囲からは、ガラス製ビーズが出土し、またその西方からは胸の位置で使用するトゥップが出土した。歯と遺物の位置より、被葬者は東側に頭部を向けて埋葬されていたと判断された。被葬者は、10 歳前後の若年者と推測され、遺物より女性と判断される。この墓では、墓室を埋め込んだ土砂の上方から、カエルのアップリケが口縁部に施された黒色浅鉢が 2 点出土した。出土状況より、これらは、土砂を埋め込む途上で、投げ込まれたことが明らかである。被葬者の周囲ではなく、土砂中に副葬する状況は極めて特異な事例である。

一方、LH-TU4 からは、頭骨、背骨、下肢の骨の一部が出土した。被葬者は、頭を西側に向け、頭部・体の右側を下方にして、膝を折り曲げた姿勢で埋葬されたと判断された。頭骨は、顔面上部・天蓋部分は崩落している一方で、後頭部はそのまま残存しており、土圧による破損としては不自然な状況を呈していた。頭部に激しい殴打が加えられた可能性を考慮し、今後分析する必要がある。被葬者の年齢はおおよそ 15 歳前後の女性と推測された。頭骨の周辺からはやはりガラス製ビーズが出土した。

LH-TU5 は、斜面を利用して、横方向に掘り込んでドーム状の墓室を構築し、大型の平石を利用して塞がれていた。この墓室にも、最初に掘り込まれた直径 80cm 程度の穴からわざわざ墓室内に土砂が投げ込まれていた。この土砂の上方には、銀製のトゥップが投げ込まれていた。LH-TU3 と共通した墓の特徴は、極めて特異なものである。墓室からは、顎の骨、頸椎、左側の鎖骨が出土した。出土状況より、被葬者は頭部が立てられた状態で埋葬されたと判断された。また左側鎖骨の残存状態が良好であったにもかかわらず、右側の鎖骨は出土しなかった。副葬品には、貝製の円盤装飾を伴う耳飾り、ガラス製ビーズ、そして石製紡錘車が出土した。

LH-TU6 は、単に下方に向かって穴を掘り込んだ墓であった。この墓からは、下顎の一部のみが出土した。状況より、被葬者は頭部を東に向け、右側を下方にして南側に顔を向けた状態で埋葬されることが明らかである。しかし、胴部が連続するはずの西側には、わず

か 35cm のスペースしか認められなかった。したがって、この墓には頭部のみが埋葬されたか、あるいは頭部と胴部が別々に埋葬された可能性が極めて高い。この墓からは、金属製リングと、猿の装飾を伴うリング状装身具が出土した。

LH-TU7 は、TU6 と同質の構造を呈していたが、人骨ならびに副葬品は出土しなかった。また同じ構造をもつ LH-TU8 からは、石製の紡錘車 1 点のみが出土し、人骨は出土しなかった。ただし TU8 では、被葬者を埋葬して土砂を埋め戻した後に、墓上で火を焚いた痕跡が明瞭に確認された。その中からは投げ込まれたと判断される土器片が多く出土した。これは、埋葬時の儀礼行為の痕跡と判断される。

## (2) ムユプンゴ遺跡周辺域の成果

ムユプンゴ遺跡周辺域においては、ムユプンゴ遺跡の南方約 1.4km の地点で、同じ尾根上に配されたパヤマ（3060m）、同じく東方約 3km のホヤパ（2628m）、東方 1.7km のサラ（2800m）、そしてシャルカル（2406m）の 4 つのゾーンにおいて、発掘調査を実施した。

これらのゾーンにおいて発掘を実施した墓は、すべて 1m 前後の穴を掘り込んだ形状を呈していた。人骨が残存する墓は確認されなかった。しかしながら、副葬品を伴う墓が、サラにおいて 2 基、パヤマにおいて 1 基確認された。副葬品はいずれも土器で、サラでは、インカ特有のアリバ口型壺と粗製の鍋がそれぞれ出土した。一方、パヤマの墓には、粗製の鍋が投げ込まれていた。これらの粗製の鍋は、ムユプンゴ遺跡やラ・ソレダー遺跡で最も出土頻度が高く、インカ国家が労働者に分配していた生活用品の一つと解釈されているものと同質の鍋であった。

パヤマ遺跡の発掘に伴う清掃作業において、大型のテラス、水路網、貯水施設、水源を確認し、記録におさめた。尾根付近の斜面上には、広大な畑地が構築されていたことが明らかとなった。

これまでに実施してきた調査を通して、ムユプンゴ遺跡周辺において、ワユワ（2773m）、ピエドラ・デ・モレール（2843m）、サラ（2627m）といった、インカ国家の畑地が確認されている。前者二つには、セロ・インフィエルニョという聖なる丘の南東側斜面・裾野に、広域にわたってテラスが配されている。ワユワは多くの場所が藪に包まれており不明瞭であるが、長さ奥行きともに最大で 40～50m、最小で 20～30m 程度のテラスが少なくとも 10-20 枚程度は配されている。またこれに隣接するピエドラ・デ・モレールでは幅 30m、奥行 4～5m ほどのテラスが、標高差 70m ほどの間に一部で連続するように配されている。これらの遺跡からケブラーダ（涸れ谷）を挟んで広がるサラ遺跡には、基壇上に大型のワカが配され、その周囲には、多くのテラス、畝、水路、そして多数のワカが構築されてい

る。

これらの畑地のロケーションは、パヤマ遺跡からセロ・ネグロに向かって下る斜面の一部に相当する。パヤマ遺跡とサラ遺跡の間に位置する現在のワシパンバ村周辺にも、テラスが認められる。こうした状況より、アンデス山脈西山系から南東方向に下る斜面一帯には、インカ国家の畑地が広域にわたって構築されていたと推測される。明らかに畑地と確認されている場所だけでも、その面積は2km×2kmに及んでいる。藪や木々に覆われて、踏査が困難な場所も含めると、耕作地はさらに広大な領域に及んでいてよい。地形を考えれば、その畑地は、セロ・ネグロ周辺域にまで及んでいる可能性がある。というのは、セロ・ネグロ周辺域にも、インカ時代のワカが多く認められるためである。この広大なインカ国家の畑地の中心は、入念にテラスや儀礼施設を配したサラ遺跡と考えてよい。標高を考えれば、栽培作物はトウモロコシである。現在に伝わる地名「サラ」は、ケチュア語でトウモロコシを意味する。

インカ国家の畑地に関して、最も詳細な文書記録が残されている地域の一つは、ポリビアのコチャバンバである。10km×10kmにもおよぶコチャバンバのトウモロコシ畑は、ストライプ状に区分され、そこに周辺域ならびに遠方から連れてこられた14000人の労働者が管理にあたっていた。収穫されたトウモロコシは、800kmほど離れた遙かクスコにまで運ばれていたこともわかっている。

トメバンバ西方わずか50km前後に位置するムユプンゴ領域にインカ国家が拡大を果たした理由の一つには、農地の確保を考慮に入れてよい。当然、ムユプンゴ領域にも、相当数の労働者が各地から配されていたことは、疑う余地がない。

### (3)まとめと今後の課題

インカ国家の「行政センター」には、墓域が形成されていない。その理由は、「ミティマ」と称された、出自の場を離れて移動させられ労働にあっていた人々が、一定期間の労働力奉仕の後に、共同体に戻ったり、周辺域に新たに村を形成したためである。

したがって、膨大な数の墓が散在しているムユプンゴ領域は、極めて特異な状況を呈しているといつてよい。しかも、本研究課題によって得られた新たなデータも、1) 墓の構築が極めて簡易的で、構築～埋葬のプロセスに時間的にひっ迫している状況がみてとれ、質の高い副葬品を伴う墓でもその状況に変わりがないこと、2) 埋葬姿勢に一定の特徴がみられないこと、3) 遺骸の一部のみを埋葬していると判断される墓が認められること等の特徴は、これまでの経緯で示唆されていた墓の解釈を明瞭に支持するものであった。ムユプンゴ領域に散在する2000基以上にもおよぶ墓は、自然死した人間を埋葬した

ものではなく、大規模な武力抗争の犠牲者を緊急的・簡易的に埋葬したものと結論付けてよからう。これは、インカ国家に関して、スペイン人が文書記録の中で記述しているような、大規模な先住民間の武力抗争が実在したことを実証する世界ではじめての考古学的資料といつてよい。ただし、本研究課題で得られた考古資料では、文書で記述されているように、インカが常に抗争の勝者とはなっていない。ムユプンゴ領域の墓の副葬品は、被葬者がすべてインカ国家に属している人々と明瞭に判断される。

武力抗争が生じた時期に関しても、極めて重要なデータが得られている。ラ・ソレダー周辺域のLIB区ならびにLRB区の墓の構築は、遺跡の放棄に近いラ・ソレダー遺跡の終末期であったことを示唆している。というのは、インカの人々の世界観に見合うように聖なる岩を加工して整地した場所、あるいは何らかの目的で構築されたテラスを切り込んで墓が構築されているからである。おそらく、複数回に及んだ大規模な襲撃を経て、ムユプンゴ領域は放棄されたものと考えられる。武力抗争・放棄は、LH区に埋葬された被葬者が身に付けていたビーズが、スペイン侵入以前のアンデス地域には存在しなかったガラス製であることから、植民地時代に及んでいたことが明らかである。よって、植民地時代にも継続していた先住民間の大規模な武力抗争が生じており、ムユプンゴ領域におけるインカ国家の終焉にはそれが直接的な影響を及ぼしていることになる。これは、「発見」・「征服」=「インカ帝国の滅亡」といった、ステレオタイプの歴史像に再考を求めるデータである。

インカ国家の「行政センター」ならびにその周辺に居住して諸労働にあっていた社会集団の具体像に関する考古学的データは、極めて少ない。その理由は、上述したように、墓域が形成されないためであろう。特異な事情で多数の墓が構築されたムユプンゴ領域では、遺跡居住者・労働者集団の実像に迫る貴重なデータが得られる可能性を秘めている。本研究課題で得られた資料は、ラ・ソレダー周辺域とムユプンゴ遺跡周辺域では、明らかに異なる特徴を呈している。前者には女性や子供・若年者が含まれており、副葬品の質も比較的高い。一方後者は、人骨が得られていないとはいえ、副葬品の質が低く、女性の存在をうかがわせる遺物は出土していない。後者には、畑地の管理を担った労働者が埋葬されている可能性が高い。一方前者は、何らかの特別な社会集団が犠牲となって埋葬されている可能性が示唆される。

ムユプンゴ領域に居住していたインカの人々は、いかなる社会集団に執拗に襲撃されたのだろうか。本研究課題で実施した調査では、抗争の相手を特定し得るデータは得られなかった。これまで研究代表者は、地理的位置関係や近隣の文書情報を基に、抗争の相手

として、エクアドル海岸部のプナ社会を強く意識してきた。しかし近年、エクアドル中央高地・北部高地でインカの発掘調査が進められるようになり、80年にも満たないエクアドルにおけるインカのおキュペイションが、広域において2期あるいは3期に分けられるデータが提示されつつある。これは、ムユプンゴ遺跡とラ・ソレダー遺跡の状況と合致するものとして、着目すべきデータである。これほど広域にわたって、共通する時期区分が認められるのであれば、時期を隔てる要因は極めて影響力の高い事象であった可能性がある。まず念頭に浮かぶのは、初期の多くの文書記録で触れられている、アタワルパとワスカルの抗争である。1582年に、調査地から20kmほど離れた村で記された文書でも、アタワルパとワスカルの激しい攻防に先住民が晒されたことが述べられている。

今後、得られた資料に関して、化学分析・形質人類学的考察を入念に進めた上で、さらなる調査・研究を継続して実施していく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

大平秀一、「『クリキンゲ』: アンデスのハヤブサ」、『古代アメリカ学会会報』、査読無、35号、2014、pp.6-9。

大平秀一、「エクアドル南部におけるインカ国家の研究: ムユプンゴ領域の発掘調査(2011)」、『古代アメリカ』、査読有、16号、2013、pp.31-42。

[学会発表](計8件)

ODAIRA Shuichi, La Alquimia y el " Dios Sol" en la Representación de los Incas, Primer Congreso Internacional de Peruanista, 2014, Society of Andean and Amazonian Studies, Nanzan University.

大平秀一、「16世紀・アンデス先住民の『危機』: 『征服』・植民地化・先住民間抗争」、2013、南山大学人類学研究所共同研究「危機と再生の人類学」講演会「古代アンデス社会の危機」、南山大学。

大平秀一・森下壽典「エクアドル南部におけるインカ国家の拡大(第2次~第3次)」、2013、第18回古代アメリカ学会、山形大学。

大平秀一、「山の神々への供物の現在: アンデスのムユ貝」、2012、第1回アンデス・アマゾン学会、湘南国際村・湘南OVA。

大平秀一、「エクアドルにおける文化遺産の管理と保存」、2012、文化遺産国際協力コンソーシアム第2回中南米分科会、東京文化財研究所。

大平秀一、「ムユの民族誌: 採取と流通」、2011、第16回古代アメリカ学会、埼玉

大学。

大平秀一・森下壽典「エクアドル南部におけるインカ国家の拡大(第1次)」、2011、第16回古代アメリカ学会、埼玉大学。

大平秀一、「民芸品原材料の獲得・流通をめぐる社会的動態: アンデスのムユ貝の事例」、2011、第32回日本ラテンアメリカ学会、上智大学。

[図書](計1件)

ODAIRA SHUICHI ed., Proyecto Arqueológico en La Zona de Mullupungo, 2013: Informe Preliminar de la Excavación. エクアドル共和国文化庁提出発掘調査報告書, 2014 (総計 87 ページ)。

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

作成途上

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

大平 秀一 (ODAIRA, Shuichi)

東海大学・文学部・教授

研究者番号: 60328094

(2) 研究分担者

なし( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

松本 建速 (MATSUMOTO, Takehaya)

東海大学・文学部・教授

研究者番号: 20408058